

英語 英文学科	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="2208 578 2387 646">科目</td> <td data-bbox="2208 646 2387 1811">日本語（小論文）</td> </tr> </table>	科目	日本語（小論文）
科目	日本語（小論文）		

問題 次の文章は、一九七九年に書かれたものです。本文を読み、あとの設問に答えなさい。

青年は既に確立している社会の規範に沿って多くの知識を獲得したい欲求と、既製のものを破壊するほどの新奇なものを求める欲求との間にジレンマを感じる。そのジレンマの中に身をおき、苦悩に直面してゆくことによって、その青年の個性が磨かれ、自我が確立してゆく。このような人格発展の過程を、一人の主人公の体験を中心にして描かれた小説を教養小説 (Bildungsroman) という。これは特にドイツ語文化圏に多く、有名な『ヴィルヘルム・マイスター』などがこれにあたる。青年たちは、このような教養小説を読み、主人公に同一化しつつ、自己の発展の道を探索するのである。戦前までは、このような教養小説は、わが国の高校生の必読書であり、彼らが成人した後も、いわば「共通の体験」として、同世代の連帯を支える役割をもったものである。現在の状況は、「…」感性の次元の急激な拡大と、それに伴う価値の多様化によって、「必読書」的な教養小説を喪失していると言えるであろう。おそらく、同世代の者が共通体験としてあげ得る書物は、マンガの類になるのではなからうか。

教養小説として、現在の青年にも相当に読まれているものとして、ヘルマン・ヘッセの『デミアン』がある。この小説の冒頭にヘッセが「二つの世界」の存在を語っているのは非常に示唆的である。主人公のジンクレエル青年にとって、両親に代表されるような、「愛情と厳格、模範と訓練」といった、明らかでよらかな世界と境を接して、「怪談や醜聞」に満ちて「美しくものすごい、あらあらしくて残酷な」世界が存在していた。この二つの世界に対するジンクレエルのジレンマこそ、先に述べたすべての青年の味わうジレンマに他ならない。ジンクレエルは敢えて第二の世界への足を踏み入れ、そこで危険にさらされながら、二つの世界の統合への魂の遍歴を続けるのである。

小説を読むことによって、青年は主人公に同一化し、その感性の世界の拡大と統合をはかる。このようなことは、小説のみではなく、絵画・音楽などの芸術の領域においても生じることである。あるいは、スポーツ選手に対する同一化として生じることもある。筆者は青年期のノイローゼの人々の心理療法的に従事しているが、このような青年が有名なスポーツ選手の姿に感動して、自我確立への努力を強化することを、しばしば体験している。テレビというメディアによって、世界的な名選手の映像に直接に接触できることが可能となったために、このようなことが生じやすくなったのであろう。スポーツのように身体動きによって感性に訴えるものは、直接にその姿を見ることが、どのような言語的表現よりもまさるので、このような点におけるテレビの有効性は非常に高いものがある。

青年が自ら創作をすることもよくある。詩や小説、絵画などを書いたり、音楽の演奏などもする。これらの創造活動を通じて、青年が鋭い感性によって多くのものを取り入れ、自我を確立してゆくのは当然のことである。筆者のような心理療法家のもとに相談に来る青年たちが、その治療の過程の中で、このような創作をすることがよくある。すなわち、心理療法といっても、結局は悩みを背負った青年がアイデンティティを確立してゆく過程そのものであり、われわれ治療者は医者のように「治療」をするのではなく、その青年の人格発展の道につきそってゆくだけであるから、そこに多くの創造活動がなされるのも、むしろ当然のことと考えられる。

英語 英文学科	科目
日本語（小論文）	

最後に、自我の確立と感性との関係において、現在青年の経験している感性\*刺戟の過剰現象について一言触れておきたい。「…」自我は外界、内界からの刺戟を受けとり、それを自我の体制の中に統合してゆくのであるが、現在のテレビやマンガなどに示される映像は、自我の統合力を無視して、過剰になりつつあると思われる。たとえば、日本の子どもたちの見るテレビマンガは、その残虐性が強いから、欧米においては受け入れられないことが、つとに指摘されている。

日本のテレビマンガではあまりにも安直に破壊や殺人が行われるのである。<sup>①</sup>わが国の青年たちは、ともかくこれらの刺戟を受け入れはするが、それを判断したり、統合したりすることを放棄しているかのよう<sup>②</sup>に思われる。一時、若者に「フィーリング」ということが流行したが、このフィーリングというのは、「…」思考や感情の機能に頼らず、ただ直観や感覚の機能に頼ってしまうことを示しているものと思われる。従って、そこには鋭い感受性と、低い道徳観や判断力の無さが同居することになる。このような点が現在の青年の感性を考える上において重要な課題となるであろう。

（河合隼雄「現代青年の感性——マンガを中心に」による）

注\* 刺戟 ≡ 「刺激」と同じ

設問 一 筆者は、青年が特有のジレンマを抱え、それを克服することで自我を確立する、と述べています。どのようなジレンマを、どのように克服するのですか。本文に即して自分のことばでまとめなさい。（二〇〇字以内）

設問 二 筆者は、一九七九年の青年について傍線（1）のように述べています。この見解をふまえて、二十一世紀を生きる若者についてあなたはどのように思いますか。あなた自身の体験などの具体例をあげて述べなさい。（五〇〇字以内）